

## 第九章 <sup>ふと</sup>太<sup>タイ</sup>っちょ太<sup>タイ</sup>太が風水にこる

太っちょ太太の愛蓮は、毎晩、いつも夫の帰りを待ち、食事を終えて、夫がシャワーを浴びている間に、背広の内ポケットにある財布を取り出した。お札がどのくらいあるかをこっそりと数えるのが楽しみだった。翌朝、夫は出かける前に、ニコニコしながら財布から百円札を何枚か取り出して、テーブルの上において出かけていき、このちょっとした心遣いで愛蓮はもう幸せいっぱいだと満足していた。

その後、夫は接待でしばしば夜中の十二時近くになって帰ってくるようになった。それが度重なると、愛蓮は不安になることもある。それは今、社会の気風をえぐった「男は金ができると良からぬことを覚える、その反対に女は良からぬことを覚えると金ができる」という流行り文句をよく耳にして、そのうえ「可愛い子・女秘書」「不倫の足跡」などというタイトルのテレビドラマを見ていると、いっそう夫のことで心配でならなかった。今の夫は金回りがいいし、若い女秘書もいる。もしこんな色恋ざたでも起こったらどうしようと、不安がつのった。それが昂じて彼女は、そう思っただけでも心が掻きたてられ、ときどき不眠に襲われ、顔に愁色を湛(た)える日も多くなった。

彼女はときどき鏡に映る自分の顔を見て憂いた。目じりの小じわが気になり、下まぶたもすこし腫れているように感じられた。食事療法で糖尿病も落ち着き、前よりやせ細って、スマートに見えた。やはり気になるのは老人に見られる皺腹と、自分の首にも鳥肌の小皺(こじわ)がたれて目に付いた。首にはネッカチーフやスカーフで装い、腹はズボンやスカートでまとうからカバーできた。しかし夜、夫の前に見せられるのは、自分の肌の白さだけ。昔のように素肌のなめらかさだけで、夫の思財もペロンペロンに参ってしまうほどの魅了はもうなくなってしまった。それで、ときどき自分はもう老けて、夫も一顧だにしてくれないと、自信をなくなってしまっていた。

夜の10時半になっても夫は戻ってこなかった。彼女はダイニングにあるソファーに座って、テレビを見ていた。どのチャンネルを回しても恋愛もの、捕り物帳、スリラーものなどで、ブツツとテレビを消してしまった。テーブルスタンドの暗い明かり、壁にかけてある山水画も霧にかかったようにはっきり見えない。こんなときに、愛蓮がよなよな寝付かれ



ないときに、いつも家で起こる煩わしいことが彼女の脳裏をかすめた。彼女一家が今のマンションに移り住んでから、主人は腰痛や頭痛に悩み、自分は糖尿病と軽い脳血栓にかかっていた。それに娘の身持ちも感心するほどでなく、素行が改まったら、一家はカナダへ投資移民してしまう。息子はオーストラリアへ留学、相当のお金をつぎ込み、まだ正式に大学へ入っていないと噂され、いまだに帰ってこない。彼女が一番悩んでいたのは主人が前のように可愛がってくれないことだった。女の第六感で主人には女ができています。彼女が心配しているのは、このことがもし本当と分かったら、この幸せの家がいつか崩壊してしまう。こういう恐怖感にも襲われて落ち着かなかった。それで彼女は風水大師に運命判断と災厄滅却してもらおうと心に決めた。

毎日、新聞広告に注意し、ついに〈易経〉研究の大家、権衡ごときの風水大師を見つけた。彼らは災禍を駆除し、財を招き、福德を寄せる神秘の超能力者であった。日中こっそり権衡大師が主催している「翔月易学研究所」へ電話をした。彼女は、

「翔月易学研究所ですか？」

「はい、研究所のものです」とやさしい女の声で返答があった。

「権衡大師に私の家の風水を鑑識していただきたいのですが、鑑識料はいくらかかりますか」と愛蓮は聞いた。

「こちらは研究所ですので、風水の鑑識料はいりません、ただ研究費を少々お気持ちだけ寄付していただければよろしいのです」

「それではお願いします」

愛蓮は風水大師の鑑識料は大金がかかると聞いていたので、たとえ大金を払っても大師に見てもらいたかった。電話で「研究費を少々」と聞いて安堵した。彼女は住所を教え、明日に来てもらうことにした。

翌日午後、二人連れの人々が「翔月易学研究所」の者と名乗り、訪ねてきた。愛蓮は彼らを応接室に迎え入れた。権衡と名乗る大師は四十歳くらいの坊主頭で、道教の道士が着用する長じゅばんをはいていた。一目で背広の上にこの長じゅばんを引っ掛けたものとわかった。彼の後に秘書らしき三十過ぎの女はショートカットで、縞模様のスカートに、赤のオーバーブラウス、手に羽根飾りのついたクロシュ帽を持っていて、大師の後について、応接室のソファに座った。

権衡は応接室の周りを見回した。何か思い当たることがあるように、頭をうなずきながら、ふん、ふん、あー、とため息を漏らした。

愛蓮は女秘書の美しい顔立ち、着衣の色配合のおしゃれさと、この貧相なむさ苦しい大師に比べて、あまりにも釣り合わないと思った。この女は男の何に惹かれたのだろう、ちょっと気をとられて、彼女が大師の吐き出したなにごとかを聞きもれたのではと思った。

「大師さま、いまなにか？」愛蓮は聞いた。

「いや、いや」と権衡は言葉を続けなかった。

愛蓮は正気にかえって、自分の悩みを言いかけた。「あのね、大師さま、私ね、体が……」。権衡は手のひらで相手の口を止めるようなサインを示して、「奥様、言わないでください。私からあなたの悩みをあてましょう」と権衡が言った。

権衡は一目で彼女の悩みを見抜いた。彼女の住んでいるマンションは高級マンションで、金に困らない、彼女は五十近くで、大方は体の故障があるのが当たり前。ご主人は金があり、時間もある、そろそろ色事にも興味をもち、彼女が夫に内緒で風水を占うのは、夫に知られたくないことを知りたいためだ。彼女は相当悩み続けてきたから、権衡はこの女は絶対にいい鴨だと判断した。それで彼はできるだけ彼女に危機感を煽って畏にはまるように企んだ。

「奥様、部屋を拝見させてください」と権衡は言った。

彼はマンションの方角や部屋の調度の置き場の位置などを見回した。彼女の住宅はこのフロアの西南側に位置し、南向きが二部屋、西向きが一部屋、そして中間に応接室その隣がダイニングと玄関広間になっている。日当たりのいい理想の位置でした。南向きの一室は書斎になっていて、マホガニー材の家具一式で揃えてある。デスク、ガラス張りの本棚、工芸を飾る陳列棚、それに「功夫茶」用の茶卓が人の目をひく。ただ椅子が「太師椅」で、硬くて座り心地はよくない。寝室も南向きで調度品も精巧なもの。タンス、ベッドやソファなども真新しく見えた。床のカーペットの模様がボタンの花だった。女秘書はベッドの緞子クッションに目を注ぎ、一つは竜の刺繍だけで、もう一つのクッションも竜の模様だった。本来は鳳でないと一對にならない。全部見終わり、権衡大師は目をつぶって、口で何か唱えた。

「お宅の土地は竜脈です。このマンションが建てられる前は小丘で、清朝のある王族の妾宅でした。右側に小さな泉があり、氣勢は上昇、大吉です。方角が西南、十二支の末にあたる。四季月の「三、六、九、十二」の四か月をつかさどります。空間は六階。六階は「六識界」に通じ、つまり眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の全能です。しかし部屋の調度は大凶です。特に書斎は災禍の源です。人災、天災、病災、事故災などなど厄難は免れないのです」と権衡大師は一気にまくしたてた。

「寝室のクッションは緞子刺繍の竜が二つで、一つの屋敷に二王は相容れません。最後は共倒れです。もし鳳がいたら、それこそ目出度く、睦まじく、末永く栄えるに決まっています。」と女秘書が付け加えた。

初めは、愛蓮は地脈が竜脈だと聞いて、心をわくわくした。ところが人災、天災、病災、事故災などなどの厄難は免れないと断言されたとき、恐怖と憂慮が一挙に襲いかかり、今にも失神しそうだった。

愛蓮の体が震え、うろたえた声で「どうしましょう。どうしましょう。」と彼女は完全に権衡の畏にひっかかった。

「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。風水は運勢を見抜き、仏門は厄払い、救世を求

めます。施主さま、よく聞いてください。怖がることはありません、仏様が救いの手を差し伸べています」と権衡がいい終わると、女秘書はすかさず、「私の研究所に古くから伝えられた金の仏像があります。それはチベットのラマ師匠が謹製した蔵式仏像で、お宅へ迎え入れ、開眼供養したなら、靈威が顕現し、鎮守の威力で、調度の大凶、災禍の源、すべての厄難が消え去ります。安泰、平穩そして先ほど大師が言われた氣勢があがり、末永く栄える家柄に戻ります」と心温かかまる声で言った。

「その仏像は買いたいのですが」と愛蓮は言った。

「南無阿弥陀仏、仏像は買うのではなく、いくらお金を出しても、仏像は行きません。あなたが心からお迎えするのです」

「それなら、お迎えします」と愛蓮は言う、

「研究所で仏像の支度金が二万円必要です」と女秘書が言った。

「え、二万円」とは愛蓮は驚いた。彼女は目をつぶり、この二万円をどうして捻出するかと迷った。夫に話して、出してもらうか、それとも自分のへそくりで二万円を出すかと迷っていた。このへそくりは彼女が十数年かかって、この小金をこっそりためたものだ。あの時分、暮らしが楽でなかった。野菜や漬物を買うときに、生地や服を買うときに値段を散々値切って貯めた小金であった。本当に食べ物をのどから攫(さら)いだしたようなお金だった。それを使うと思うと心が締め付けられるような痛みがあり、夫にも知らせたくないへそくりの金でもあった。

女秘書はじっと愛蓮の顔を見つめた。彼女の心の移り変わりがわかるようであった。愛蓮は眉をひそめ、目をつむり、目じりの皺も一挙に集中した。閉まっていた唇がだんだん緩やかになったとき、彼女の目は開き、決心がついたようだった。

「仏をお迎えします、それで供養開眼はできるだけ早くしてください」と愛蓮は言った。

「それなら、支度金を受け取ったら明日にもします」と女秘書が答えた。

「銀行へいきましよう」と女秘書は催促するように言った。

その間、権衡はひとごととも言葉を挟まなかった。ただ女秘書のやり取りを聞いていた。「支度金は明日にして、間違いはありません」と念をおして言うと、愛蓮は風水大師の二人を追い返すようにテーブルにおいてあった湯飲み茶碗を片付けた。

その日の夜 11 時に、夫の思財は酒に酔いつぶれて帰ってきた。思財がソファーに脱ぎ捨てた背広の上着を、愛蓮は後ろめたい気持ちを感じながら、ポケットや内ポケットを探って見た、財布はなかったが、ポケットに口紅を拭い取ったちり紙があった。彼女はそれを見たとき、風水大師が占った通りだった。彼女は悔しさと嫉妬の火がもくもくと燃え上がった。彼女は今まで心の中でもやもやして、こらえていた気持ちを、今度こそこの証拠を夫にぶっつけようと思った。

翌日朝、愛蓮は朝食のミルクと食べ残しの焼餅だけで、いつもある野菜やソーセージもなかった。冷蔵庫にあるのだが、彼女は出す気がしなかった。愛蓮は椅子に座ってじっと主人の座るのを待っていた。二人は目もあわせず、黙々と朝食をとった。夫が食べ終わり、食卓から立ち上がろうとしたとき、

「ねえ、今日何時に帰るの？」愛蓮は言葉を切った。

「そうだな……、何時になるかな？接待がなかったら早く帰るよ」

「毎日接待で、誰を接待するの？」

「そりゃあ、請負で世話になっている、そら、あの人、あの人、所長さん」

「どこの？」

「区政企画課の、そんなこと聞いてもわからんよ」

「まあ、わからなくても知りたいの」

「とにかく早く帰るよ」

愛蓮は心臓がどきどきして、今にも口紅のちり紙のことを切りだそうと思ったが、夫はソファに投げ捨ておいた背広の上着をとるなり、大きな声で、「おい、これは誰の上着だ」と愛蓮に聞いた。「なによ、昨夜、あんたがソファに脱ぎ捨てたじゃないの？」  
「なに、俺が脱ぎ捨てた背広？馬鹿な、あつ、やつのだ、あのスケベの所長のだ」

思財はその上着をもって出て行った。

ダイニングのテーブルにコップにまだ呑み残しのミルクがすこしあり、焼餅はきれいに平らげた。愛蓮はぶっつけようと思った嫉妬の火の玉を幸い夫にぶっつけなくてよかったと心を撫で下ろした。

愛蓮は銀行から支度金のお金を下ろして、家に着いたすぐ後に、権衡大師と女秘書がやってきた。昨日権衡は道教の纏う長じゅばんを着ていたのが、今日は和尚の着る法衣に着替えた。仏様の開眼供養の経をあげるから、それに着替えたのだろう。

権衡は玄関に入るなり、書斎に直行して、マホガニー材のデスクに絹に包まれた仏像をおもむろに置いた。合掌して一礼した。女秘書は愛蓮が支度金を用意してであると聞いたあと、供養代と線香代にも五千元が必要だと愛蓮に言うと、愛蓮は「なに。そんなこと言わなかったじゃない」と驚いた目つきで女秘書を見つめた。

「本当はいらないけど、研究所に長老がいて、それにこの人たちが、仏様が渡御(とぎよ)供養もしてくれたので、その喜捨としていただきたいの」。女秘書はいい終わると愛蓮の目をじっと見つめていた。

愛蓮は口をつぐんで、すぐに返事をしなかった。女秘書は権衡に向かってうなじを何回もあげて、権衡も話すように促した。権衡は人との駆け引きを手馴れたもので、初めは大金を吹っかけて、相手の出方を見て、金をどのくらいなら出すかを判断した。もちろん底値を割るようなへまはやらない。

「奥様、仏様もお宅にお出でいただき、これから一番大事な仏様の開眼供養します。

私のほうも長老だけに喜捨という意味で、三千元にお布施してください。南無阿弥陀仏」愛蓮に向かって頭を下げ合掌した。

愛蓮は大師の突然の合掌拝礼に驚き、「はいはい、大師さまの喜捨で結構です」とあっさり承諾した。この後、事前に準備した要領で、仏様の開眼供養のお経を読誦(どくじゅ)しはじめた。

愛蓮は大師のあげるお経の意味はわからないけれど、お香の漂う香り、蠟燭のゆれる炎、横に端座している女秘書の敬虔な姿をみて、彼女は家族の者が必ず仏様にご加護され、心身を祓い清め、厄払いでき、幸せになると信じた。それなら三千元では安い。今月の食事代から出そうと考えた。

供養が終わると、「大師さま、ぜひ写真一枚を撮って記念に残したい、それに娘や息子にもこの供養行事を見せてやりたいんです。もちろん大師さまがおっしゃった喜捨はします」と愛蓮は愛想よく言った。

「写真は……」女秘書は写真を撮るということで、心がひやりとした。彼女はいやだった。仮釈放の身の上に、今度のことがばれると刑務所行きだから、女秘書は乗り気ではなく、何かにかごつけて断ろうとした。

「うん、そうですね、一緒に写真を撮りましょう」と権衡はあっさり言った。彼は今度の贋品仏像の詐欺芝居はできるだけうまく演じ、特に相手に疑られる言動をとらないと思った。写真をとるのも相手の疑心をなくすことだから、彼は写真を撮ろうとあっさりと返事をした。

タイマーで三人一緒の記念写真を撮って、愛蓮は大変な喜びだった。三千元もスッと財布から出して、なんの気ふさぎもなかった。風水大師の二人は帰った。

その後、愛蓮は今朝のことを思い返した。もう少しで自分は口紅のちり紙のことで嫉妬の火が燃え上がろうとするところだった。仏様のご加護で夫を浮気にさせなかった。そして自分の気持ちをも収めてくれた。仏の靈威がこんなにはやく現出するとは思ってもよらなかった。仏様のおかげで一家が平安に過ごさせてくれたと感激した。

数日して、愛蓮が風水大師に送った書留の記念写真が送り返された。郵便屋さんがある書留封筒をはや引きした夫の思財にわたした。封筒には住所不明の判子が押されてあった。思財は玄関に入るなり、封を切ってみた。かつて彼がペテンにかかった権衡和尚と翔月尼と名乗る女ペテンの写真じゃないか。驚きと怒りがどつと頭に来た。彼は自分がペテンにかかったことで自己嫌悪に陥り、人にも話せなかった。それこそ友人にも知られたら、愚の骨頂として、皆から嘲笑われるだけでなく、今後の付き合いにも立つ瀬がない。幸い自分が騙されたことを妻や友人に知らせていなかった。もし自分が騙された同じペテンに妻も騙されたと知ったら、愛蓮は怒りと鬱憤で気が狂うだろう。妻がペテンにかかったことを知らなければ……、できれば彼女は一生その事実を

知らせてくなかった。

「おい、帰ったぞ」思財は大きな声で愛蓮を呼んだ。夫の呼び声を聞いて、書斎から飛び出した愛蓮を見て、「書斎で何してるんだ」と聞いた。

「私、いま仏様に拝んでいたところよ」

「仏様？ どこに仏様があるんだ」思財は聞いた。

「あなたの書斎によ」

「ええー、書斎に？」と思財はわざと聞き返した。

「この前、あなたに相談しようと思ったが、急だったので、風水大師にきてもらって、風水を占ってもらって、ついでに仏様をお迎えしたのよ」

「この写真の人か？」思財は聞いた。

「この写真どうしたの？」

「郵便屋さんが住所不明で返してきたよ」

「どんな風水大師か？」思財は聞いた。

「本当にお偉い大師で、風水を見た後、仏様をお迎えするように薦められてお迎えしたの。その後、お経まで上げてくれたのよ」と愛蓮はうれしそうに言った。思財はお金を騙されたのではないかと聞いたかったが、なかなか口に出せなかった。

「それで仏様にはいくら払ったんだ」思財は聞いた。

「お金は全部で二千元よ、食事代から出したの」と愛蓮はへそくりの二万元のことを言わず、三千元の布施を二千元と嘘を言ってしまった。

「そんなに安いのか」

「研究所だから」

「何の研究所？」

「翔月易学研究所よ」

翔月と聞いた思財はてっきりあのペテン一味に間違いがなかった。幸い二千元ですんだからまあいいか。一家が平穏な暮らしができるなら、と思い、それ以上、何も聞かなかった。愛蓮も嘘を言って、その場をしのいだが、いつかは尻尾を出して、また嘘がばれるかも知れないと思った。でも愛蓮にとっては、仏様に来て、一家が平安に暮らせるようになったことだけがうれしかったのだ。

(完)